

夢の観点から見た筒川島子（いわゆる浦島太郎）説話 —時間性と空間性の変容—

名島潤慈*

The folktale of Tsutsukawa no Shimako (so-called Urashima Taro) from the view point of dreams: Change of time and space

Junji NAJIMA

I はじめに

夢は時空の制約から免れる。夢のなかでは、時間と空間のカテゴリーが無視されてしまう (Fromm, 1951)。

夢を分析する場合、通常の夢分析では、夢の構成要素やプロットについての夢主の連想を取る。夢主が故人の場合には夢主自身の連想が取れないので、夢主が書いた日記や手紙等から夢の意味を推測する。夢が昔話や説話の場合には作者が誰か分からないので、夢の構造分析のみ行うことになる。

ところで、浦島太郎という名前は室町時代末とされる『御伽草子』に収められている「浦島太郎」からであるが、歴史を遡ってみると、8世紀の『丹後国風土記』の逸文の筒川島子（水江浦島子）、『日本書紀』巻第14の雄略天皇22年（西暦478年）の秋7月の件の瑞江浦島子、『万葉集』第9巻の中の水江浦島子がある。本論文では、3つのなかで最も詳しく記述されている丹後国風土記逸文の筒川島子の説話に焦点をあてる。なお、原文中の嶋子は島子とする。[佐々木編（1954）の『新訓万葉集』上巻では「水江の浦島の子」、佐竹ら校注（2000）の『万葉集二』には「嶋子」という表記が見られる。なお、万葉集第9巻の水江浦島子の説話は以下、万葉集説話と称することにする。]

風土記における該当箇所は、岩波書店刊行の『風土記』（秋本校注、1958）の中に収められている逸文の中の「丹後国」である。もともと丹後国は和銅6年（713）4月3日に丹波国から独立した。同年5月2日には、天智天皇の第4皇女である元明天皇（661-721）が諸国に対して地誌を提出するよう命令を下した。丹後国風土記は、それからしばらくして提出された。

丹後国風土記それ自体は完全な形では残っておらず、逸文は13世紀後期の『新日本紀』の巻12に収載されている。そこには、「丹後の国の風土記に曰はく、与謝の郡、日置の里。此の里に筒川の村あり。此の人夫、日下部首等が先祖の名を筒川の島子と云ひき。為人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。斯は謂はゆる水の江の浦島の子といふ者なり。是は、旧の宰伊預部馬養の連が記せるに相乖くことなし」（秋本校注、1958）とある。文中の「宰」は国守である。

水野（1975）によれば、馬養は斉明3年（657）に出生し、大宝2年（702）ころに45歳で死去、

* 山口学芸大学名誉教授

丹後国の国守であった文武2年（698）のころに浦嶋子伝説を筆録したという（馬養が筆録した原文そのものは残っていない）。

粗筋だけ先に言えば、筒川島子説話の主人公は筒川島子（いわゆる水江浦島子）で、長谷の朝倉の宮に御宇しめしし天皇（5世紀後半の雄略天皇）の御世の当時という。海に釣りに出た島子が小船の中で眠ると島子に釣られていた亀が乙女になり、一緒に蓬萊山の宮殿に行き、3年後に島子は自ら希望して与謝の郡の日置の里の筒川村に帰るが、以前の村も里も見当たらないし、親もいない。そして島子は、乙女から開けることを禁止されていた玉匣（いわゆる玉手箱）を開けてしまう。最後に島子は涙にむせんであてどなく徘徊する。[万葉集第9巻の中にある「水江浦嶋子を詠みし一首 短歌を并せたり」では、玉匣を開いてみたら元のように家はあるだろうと思って嶋子が玉匣を少し開くと、中から白雲が飛び出して常世辺（常世の国）のほうへたなびいていく。嶋子は叫んだり転げまわったり足摺りしながら意識を失い、最後には死んでしまう。最古のものと思われる丹後国風土記逸文の筒川島子の最後はあてどなく徘徊するだけであったが、万葉集説話の嶋子は死亡するという違いがある。ちなみに、この万葉集説話では「亀」も「眠り」も出てこない。一方、日本書紀の中の雄略天皇22年の秋7月の瑞江浦嶋子に関する記述はごく短く、「大亀」はいるが「眠り」はない（坂本ら校注、1967）。ただし、釣り上げた亀が女性に化すのは筒川島子説話と同じである。]

Ⅱ 丹後国風土記逸文の解説

以下、筒川島子説話を計4つの場面に分けて解説していく。

1. 第一幕

容姿端麗な筒川島子は小舟で魚釣りをする。3日3晩釣れなかったが、そのとき1匹の五色の亀が釣れる。島子は奇異に思って船の中に亀を置いてそのまま寝ると、亀はたちまち麗しい婦人（亀比売）になる。[島子は小舟の中で眠り、眠りの中で亀が麗しい婦人になる（Dream 1）。ここでは、「心に奇異と思ひて船の中に置きて、即て寝るに、忽ち夫人と為りぬ」とあるので、島子はごく自然な形で寝ている。ちなみに、高橋（2022）の調査によれば、京都府与謝郡伊根町の浦嶋神社（宇良神社）の絵巻『浦嶋明神縁起』（鎌倉時代作成）に描かれている亀はアオウミガメとのことである。]

ところで、その麗しい乙女（女娘）は自分のことを、仙人が住む天上界から来た者（天上仙家之人）だと言う。そして、乙女は島子に、海の彼方の蓬萊山（蓬山）に行こうと言う。島子は乙女が神の娘（神女）であることを知る。

2. 第二幕

島子は乙女が指さす方向に小舟を漕ぎ始めるが、乙女が目を閉じて眠れと命じたのですぐに眠る。[島子は眠りの中でさらに眠る（Dream 2）。ここでは、「嶋子、従きて往かむとするに、女娘、教へて目を眠らしめき」とあるので、乙女が島子を眠らせている。]

小船が海の真ん中の広大な島に着くと、大きな高殿がある。門のところで7人の童子（昴星）と8人の童子（畢星）が出現する。乙女の両親が迎えてくれる。兄弟姉妹もいる。御馳走が出る。楽しく踊る人たちもいる。[昴星と畢星は中国古代天文学の28宿の中の西方7宿の中の2つ。昴星も畢星もおうし座である。]

さて、夜になって皆が帰ると、2人は夫婦になる。そして、仙都（和語の常世のこと）に遊ぶこと3年、島子は両親や故郷のことが気になり、乙女に、少しの間故郷に帰らせてほしいと言う。乙女は、私を棄ておくのはひと時だけにして、必ず帰ってきてと言う。[島子と乙女が過ごした場所は丹後国風土記逸文では、「蓬山」「海中博大之嶋」「仙都」「神仙之堺」などと表記されている。]

出発の日、乙女は島子に玉匣を渡し、この箱をあげるが、私にまた会いたいと思うのならこの箱を固く握りしめて、けっして箱の蓋を開けてはならないと言う（開くなの禁止）。

3. 第三幕

2人は分かれて別々の船に乗り、乙女は島子に目を閉じて眠っていると命じる。そして、あっという間に船は筒川村に到着するが、かつての村の姿はない。[島子が眠りにつくや否や、あっという間に故郷に帰る。島子は眠りの中でさらに眠っている（Dream 3）。ここでは、「即て相分れて船に乗る。仍ち教へて目を眠らしめき」とあるので、乙女が島子を眠らせている。ちなみに、別の船に乗った乙女のほうは途中まで島子の乗る船と並走したのではないかと思われる。]

水江浦島子の家族は今どこにいるかと島子に聞かれた村人は、年寄りの言い伝えでは昔水江浦島子という者が海に出たまま帰ってこなかったと聞いたことがある、300年余り（三百余）年を経たことをなぜ突然きくのかと言う。

4. 第四幕

途方に暮れた島子はひと月ばかりさまよって歩くが親たちに会えない。島子は玉匣を撫でながら乙女のことを思う。そして、島子は以前の約束を忘れ、すぐさま玉匣を開けてしまう。すると、あっという間にかぐわしい姿のものが風雲に引かれて大空に飛んでいく。[島子は我知らず「開くなの禁止」を破ってしまう。この箇所訓み下し文は、「乃ち、玉匣を撫でて神女を感思ひき。ここに、嶼子、前の日の期を忘れ、忽ちに玉匣を開きければ、即ち瞻ざる間に、芳蘭しき體、風雲に率ひて蒼天に翻飛けりき」である。]

島子はかぐわしい姿のものが大空に飛んでいくのを見て、乙女と約束したことを違えてしまったので再び乙女と会うことはむずかしいことを悟る。そして、頭を振りながら、あてどなく涙にむせんで徘徊する。[かぐわしい姿のものについて注記すると、釈日本紀に収載されている逸文の原文では「芳蘭之體」である。訓み下し文では「芳蘭しき體」となり、意味としては「若々しく美しい姿態。神仙としての浦島の若々しさ」となる（秋本校注, 1958）。]

Ⅲ 筒川島子説話についての考察

1. 夢からの観点

中世型と近代型の浦島太郎は海辺で子どもたちにいじめられていた亀を助けたお礼に亀が浦島太郎を竜宮城へ連れていくという動物報恩物語であるが、これは丹後国風土記逸文などの古代型にはない。このような動物報恩物語への変化は、文化的変容によるものかと思われる。

丹後国風土記逸文の筒川島子説話は、丹後国の国守であった馬養が当時あった説話を記録したものという。ただし、馬養自身が創作したのではないかという説もあるし、中国の「洞庭湖の竜女」説話（君島, 1984を参照）が日本に伝わってきたものを馬養が脚色したのではないかという説もある。[「洞庭湖の竜女」では、強い風雨によって娘（実は洞庭湖の竜女）の乗っていた小舟が転覆するが、若い漁師が彼女を助ける。竜女は、命を助けてもらったお礼に漁師を竜宮城に招くと言う。そして2人は後に、竜宮城で幸せな結婚生活を送る。しかし、漁師はある日ふと故郷の老婆のことを思い出し、故郷の家に帰りたいと竜女に頼む。竜女が引き留めても漁師の気持ちは変わらないので、竜女は手箱を漁師に渡し、自分に会いたくなったらこの箱に向かって名前を呼べ、しかしけっして箱の蓋を開けてはならないと言う。故郷に帰った漁師は知らない人ばかりで驚き、竜女に事の次第を尋ねようと思って手箱の蓋を開けてしまう。すると、一筋の白い煙が立ち上って漁師はたちまち老人に変わり、やがて死んでしまう。この洞庭湖の竜女説話の結末は、万葉集説話のそれと類似している。]

小島ら（校訂・訳）（2007）は丹後国風土記逸文の筒川島子説話について、「当代の文人伊予部馬養が、赴任先の丹後国を舞台に、『水江』（湖の意）で漁をする『島子』の原話を元にして、海

洋性と神仙思想とを付加し、漢文作品として作り上げたものを転載したのがこの風土記の話」と述べている。ともあれ、筒川島子説話の成立に関しては諸説あってよく分からない。

筆者の推測では、中国人にしる日本人にしる、もともと誰かが夢の中で体験したことが発端となってこのような説話ができあがったのではないかと思われる。ただし、発端は誰かの夢であったとしても、その後、説話が伝播されていく過程のなかでいろいろな修正が施されたのであろう。[平安時代初期の『竹取物語』(かぐや姫の物語)も同様かと思われる。もっとも、竹取物語は夢ではなくて、白昼夢の可能性もあるが。]

ところで、丹後国風土記逸文の筒川島子説話では「夢」という言葉はまったく用いられていないが、眠りの中で場面が出現・展開していくので、基本的に夢の中での出来事になる。そして、眠りの中で眠り、さらにまた眠っているので、夢が三重になっている。ちなみに、筒川島子説話が夢の中の出来事であるという指摘は、既に長谷川(1980)や河東(2020)によってなされている。[『日本書紀』『万葉集』『御伽草子』などにおける説話においても「夢」という言葉は出てこないが、江戸時代成立と思われる『浦島太郎一代記』(林, 2005)では、浦島太郎の子どもの鴛子が美婦人に誘われて蓬萊に行くが、父母に会いたいと思って故郷に帰る。そのときのことは、「我父母に逢て後蓬萊に帰るべしとて小船乗じて一睡の夢の中に水江里龍穴の邊に着岸して」云々と記されている。]

2. 開けるなの禁止について

中を覗いてはいけないとか外を見てはいけない、後ろを振り返って見てはいけないといった「見るなの禁止(見るなの禁)」は世界の神話や民話などにおいてよく見受けられるが、本論文では、玉匣の蓋を開いて中のものを見てはいけないという意味で、「開けるなの禁止」という言葉を用いる。ここでは、ただ単に見るのではなくて、閉ざされているものを開いて中に入っているものを見るという点を強調している。逆に言えば、(禁止を破って)箱の蓋が開かれることによってそれまで箱の中に閉じ込められていたものが外に飛び出してくるのを目にするということになる。

筒川島子説話における三重の夢の終結部は見知らぬ人ばかりの故郷であり、呆然自失した島子は玉匣を撫でながら乙女のことを思い、すぐに玉匣の蓋をあけてしまう。結局、筒川島子は「開けるなの禁止」を破った後、あてどなく涙にむせんで徘徊するしかなかった。この結末は、禁止令を破った場合の悲劇を表している。

ちなみに、万葉集説話では結末が「嶋子の死」となっている。この点に関して巖(2002)は、日本の玉手箱とギリシャのパンドラの箱と中国の美人の腕囊(腕のところに引っ掛ける小さな箱のような物)は、その形も効能(蓋を開けると災いをもたらす)もほとんどまったく同じで、これは、古代において、ヨーロッパ文化の発祥地であるギリシャから中国大陸の揚子江を経て、日本列島の大坂湾に到るまで、人類に共通する一種の原始的な思惟形態が存在していることを示すとしている。

万葉集説話における水江浦嶋子の死を比較文化論的に見れば、巖のような言い方も可能かもしれない。ただし、水江浦嶋子の死を夢という観点から見ていくと、嶋子は「死」から再生する可能性を残している。一般的に言って、夢の中での夢主の死は心理的な転回点を意味することが少なくないからである。

3. 時間の問題

島子が過ごした仙都での3年間は故郷での300年余りに相当している。言うまでもなく、仙都での3年間(物理的時間)と言っても、これは第三者の目から見た場合のことである。島子自身からすれば、毎日が楽しいばかりであり、それこそあっという間の時間であったろう。しかも仙都は文字通り仙人たちの住む都、つまりは不老不死の場所であり、そこでの体験的な時間(心理

的時間)の経過はほんの一瞬であったろう。

仙都でのあつという間の時間も外から見れば3年間であり、それが故郷に帰ると300年余りが経過している。そして、鳥子は開けるなの禁止を破った後呆然自失といった感じのまま説話は終わる。認識論的には、きちんとした決着のない悲劇となろう。対人関係論的には、自分が捨てた故郷の親に再び会いたいという望みは実現されないまま終わっている。

3年間と300年余りという物理的な時間の差が生じた理由についてはよく分からない。夢との関連で言えば、大きな時間差を伴う場所から場所への移行はあまりにも唐突であり、だからこそ乙女は鳥子に眠るよう命じたのかもしれない。

4. 時間旅行としての夢

それにしても、鳥子本人は変化していないのに、鳥子が関わる世界が300年余り後の世界というのは興味深い。これは、未来世界へのタイムトラベルと言えるかもしれない。

鳥子に玉匣を渡したさいの乙女の言葉は、自分にまた会いたいと思うのなら玉匣を固く握りしめ、けっして玉匣の蓋を開けてはならないというものであった。つまり、もしも鳥子が玉匣の蓋を開けないまままでいたとしたら、鳥子はかつて住んでいた仙都に再び時間旅行して戻ることが可能であったろう。

結局のところ、筒川鳥子説話における夢は鳥子が時間旅行するための装置として機能していると言えよう。[われわれが例えば夢の中で小学生の自分の夢を見た場合、それは、夢の中で小学生のときを思い出したというよりも、夢の中で小学校時代の自分に時間旅行したというほうが正確かもしれない。もっとも、その夢を見ているときの夢主には、自分が時間旅行しているという意識はないであろうが。]

IV おわりに

眠りと夢についてまとめると、Dream 1では鳥子は小船の中で自ら眠り、夢の中で亀が乙女になる。Dream 2では乙女に命じられて眠り、そのなかで仙都(蓬莱山の高殿)に行く。Dream 3では乙女に命じられて船の中で眠り、そのなかで故郷に行って驚愕と失意の体験をすることになる。このようにしてみると、すべては夢の中ということになる。そして、夢の結末部は、あてどない、涙にむせぶ徘徊で終わっている。これは鳥子の見た悪夢であると言えよう。

筒川鳥子説話は起源も創作過程もはっきりしない。馬養が筆録したのが7世紀末で、説話の成立はそれ以前であるが、それがいつかははっきりしないし、そもそも誰が説話を作ったのかもはっきりしない。このようにはっきりしないところが多いが、本論文では、夢という観点から筒川鳥子説話を分析してみた。

分析した後の感想としては、筒川鳥子説話はその構造が大変複雑なことである。また、説話に含まれているテーマも、亀から乙女への変身、乙女からの誘惑と受諾、仙都での悦楽的生活、故郷への帰還がもたらす幻滅と失意、開けるなの禁止と禁を破るということ、時間経過の違い、夢の持つ機能など魅力的なテーマが多いので、これからも吟味を続けたい。

[付記] 本論文は、2022年12月27日に山口学芸大学・山口芸術短期大学で開催された第2回日本時間学会山口芸大支部研究会(三池秀敏学長主催)における筆者の講演「夢の観点から見た筒川鳥子(浦島太郎)説話一時間性と空間性の変容」を基にして作成されている。

文献

秋本吉郎(校注)(1958) 風土記 岩波書店

Fromm E (1951) *The forgotten language: An introduction to the understanding of dreams, fairy tales*

- and myths*. New York: Rinehart & Company Inc. (外林大作訳, 1952, 夢の精神分析—忘れられた言語—, 創元新社)
- 巖紹盪 (2002) 「浦島伝説」から「浦島子伝」への発展について—亀と蓬莱山と玉手箱についての文化的解説— <https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/record/files>
- 長谷川政春 (1980) 古代文学と夢の構造 (一) 東横国文学, 12, 1-12.
- 林晃平 (2005) 翻刻『浦島太郎一代記』—在地伝承の新資料の紹介と外題— 苫小牧駒澤大学紀要, 13, 1-16.
- 河東仁 (2020) 夢をめぐる日本の昔話について—シャマニズムの視点から— まなびあい, 13, 201-210.
- 君島久子 (1984) 月をかじる犬—中国の民話— 筑摩書房
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守・植垣節也 (校訂・訳) (2007) 日本書紀 下・風土記 小学館
- 水野祐 (1975) 古代社会と浦島伝説 上 雄山閣出版
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 (校注) (1967) 日本書紀 上 岩波書店
- 佐々木信綱 (編) (1954) 新訓万葉集 岩波文庫
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 (校注) (2000) 萬葉集二 岩波書店
- 高橋大輔 (2022) 仮面をとった浦島太郎—その正体をめぐる四七八年のミステリー— 朝日文庫